世界は予想外

商学研究科長　井　上　伊知郎

最近の世界政治・経済の動きを見ていると、人々の予想しなかったことが多く生じているように思われる。一つは今進行中の米国大統領選挙の動向である。民主党候補に関しては、無名だったサンダース氏がクリントン氏に肉薄するなど予想もされていなかったと思う。あの米国で民主社会主義者を自称する高齢のサンダース氏を、男女を問わず若者たちが熱狂的に支持した。草の根層だけを取ってみれば、サンダース氏がクリントン氏を圧倒していたのではないかとさえ感じる。

共和党候補に関しては、伝えられる発言・人柄からして、大統領候補になど選ばれてくるはずがないと思われていたトランプ氏が、一般の共和党員から熱狂的に支持され、他候補を早々と撤退に追い込み、クリントン氏の対抗馬になるなど想像だにされていなかったと思う。

レーガン大統領以後の競争重視・市場機能重視の政治によって人々の格差が広がり、しかも多数の人々が下層に転落して、既存の政治家への失望が強まったためであることは確かであろう。この失望を深くしたのが、2007年８月に顕在化した住宅バブルの崩壊と金融恐慌を伴うその後の深刻な不況であったことは、今となっては明らかである。

しかし、そうした政治潮流や深刻な不況については事前に認識されていても、一般の多くの人々がサンダース氏やトランプ氏を熱心に支持して、既存の政治家層を刷新してしまうかもしれない、きわどい事態につながるとは予想されていなかったと思う。サンダース氏やトランプ氏こそ、米国社会の多くの人々の気持ちを最もよく受け止めた政治家なのかもしれない。

EU 離脱を問う６月のイギリス国民投票でも、残留派が勝利するとの予想が多かったように思う。結果が出る直前の世界市場では残留派の勝利を予測し、株式市場もポンド為替相場も上昇に転じていたのである。しかし、米国大統領選挙でのサンダース氏やトランプ氏の躍進は目覚ましく、もしトランプ氏などが新しい米国大統領に選出されたならば今後の世界はどうなるのかと、まともに心配されるほどに予想は覆されていた。この米国大統領選挙での新しい事態はすでに認識されていたが、それが EU 離脱を問うイギリス国民投票に何らか関連があるなどとは考えられていなかったように思う。

統一通貨ユーロの導入は、楽観論から周辺国の金利水準をドイツの金利水準に収斂させ、周辺国での資産価格の上昇につながり、果てはバブル経済を引き起こした。米国のバブル経済が崩壊すると、EU のバブル経済も連動して崩壊した。EU 自体の崩壊が危惧されるほどに、EU 経済は混乱した。イギリスはユーロに参加しておらず、それなりに政策の自由度を確保して対応したが、問題の一国であったばかりでなく、EU に加盟する東欧諸国からの移民の受け皿にもなっていた。

EU に反感を持つ一般の人々が多数を占めていたことは、労働党の党首選にもよく表れている。保守党下院議員の６割弱が残留支持であったのに対して、労働党では下院議員の９割以上が残留支持であったにもかかわらず、強硬左派である党首のコービン氏は残留で動かなかった。既存の政治家集団の強い反発を受けても、一般労働党員の圧倒的支持を得て、党首に再選されている。イギリス政治の底流には、米国に極めて似た構図があったと思われる。

米国大統領選挙の帰趨だけでなく、EU の大陸側でも、中国でも、政治・経済の動向は予断を許さない。一般の多くの人々の希望を実現するためにはどうすればいいのか。あらゆる常識や固定観念に支配されずに、事実の展開に目を向け、そこにある真実を洞察するのは、学問・研究の責務でもある。最近の世界情勢を分析する場合には、とりわけ虚心坦懐な科学の精神をもって臨まなければと肝に銘じている。

（2016/10/31）